一

　　　　　　　　　（文と絵　シスター中澤昭子）

「福者マードレ・マダレーナ・モラーノ

　　シチリアの熱い風！」

皆さん、この絵を見て、福者ってなーに？マードレ・モラーノってだーれ？

シチリアってどこの国？と質問が次々に浮かぶのではないかと思います。

それで、今日はこの方がどんな方で、どのようなことをなさったのかお話しましょう。

絵を見ると、この方はシスターであることがわかりますね。　そうです。これからするこのお話は、この方が皆さんのように小さかった時から、苦しいことも、悲しいことも、乗り越えられる強くて優しい子だったこと、そして、ドンボスコの様に神様を知らない子どもたちに神様のことを教え、みんなを幸せにする子だった！ということから始めましょう。

では、マダレーナの家の中をそっとのぞいてみましょう。

　二

まず、マダレーナの家族の紹介をしましょう。

お父さんはフランチェスコ。織物を売る仕事をしていました。

お母さんはカテリーナ。布を織る仕事をしていました。

お姉さんはフランチェスカ。優しいお姉さんで、お母さんのお手伝いをしていました。

お兄さんはピエトロ。大の仲良しでした。そしてマダレーナ。

マダレーナの下には弟のジュゼッペと妹のオルソラがいました。

たいへん仲の良い七人家族でした。

貧しい生活でしたが、　みんな神様の愛の中で幸せに暮らしていました。

　三

ところが、その幸せは長くは続きませんでした。

マダレーナが小学校に入ったばかりの年の冬のこと、ものすごい寒さが続きました。

寒さの中で、食べるものもなくなりはじめ、ストーブの油や

まきにも不足し、村中、国中が大変な冬になりました。

この寒さの中でマダレーナのお父さんは肺炎にかかって亡くなり、後を追うように、お姉さんのフランチェスカも、亡くなってしまったのです。

お母さんは四人の子供達、十歳のピエトロをはじめ、八歳のマダレーナ、五歳のジュゼッペ，一歳のオルソラを抱え、どのように生きていったらいいのかとうなだれました。

小さなマダレーナは、お母さんのその苦しみがよくわかり、お母さんの悲しみなくそうと一生懸命でした。

四

主任神父様はこの苦しい家族を慰め、助けに来てくれたので、お母さんも苦しみから立ち直り、機織りの仕事に取り掛かり始めました。

マダレーナのお母さんへの愛は細やかで、お母さんを必死に助けました。お姉さんがしていたリボンのような小さい織物を織ったり、お母さんがつくった織物を売りに行ったり、妹のお世話をしたり、お母さんに辛い思いをさせないように頑張りました。

こうしている間に、小学校の低学年の終わりの時が来ました。

勉強の良くできたマダレーナにとって、学校をやめることは、つらく悲しいことでした。

でも、家のことを考え、大好きな学校は止めました。そして小さな手で頑張って布を織り、お母さんと一緒に町まで売りにいけるまでになりました。

五

お父さんやお姉さんが天に召されたことを思い起こすような、ある寒い冬の日のことです。

マダレーナとお母さんは頼まれた仕事を届けるためと、マダレーナの作ったひもを売るために、遠いキエリの町まで行きました。その帰り、疲れ果てたお母さんを一生懸命励まして川沿いの道を歩いていました。

「お母さん。ほら、もうキエリ川の橋よ」。

「暗くなってきたわね。早く帰りましょう。」

「オルソラが待っているわね。」

マダレーナは疲れたお母さんの顔を見て、元気づけようと一生懸命でした。

お母さんにも優しいマダレーナの気持ちがよくわかり、つめたい手をしっかりと握りしめました。

お母さんは、こんなに小さいのに家族を助けようとす　るマダレーナを抱きしめようとしたとき、

六

暗くなりかかった草むらから、突然男の人が現れ、

「金を出せ！！ださないと命がないぞ！」と近寄ってきます。

びっくりしたお母さんは、大声で助けを求めて叫びました。村に差し掛かった薄暗い川のほとりです。

お母さんの声は消えてしまいそうです。お母さんにしがみついた小さいマダレーナは、毎晩お祈りをささげる聖ヨゼフ様に

「聖ヨゼフ様助けて」と叫んで助けを求めました。

　七

すると、足音とともに強そうな男の人が現れたのです。

驚いたのは泥棒です。あっと言う間に逃げていきました。

現れたがっしりとした男の人は二人に近づき、

「村に帰るのですか。私が送ってあげましょう。」

と言って、一緒についてきてくれましたが、お礼を言おうとしたら姿が消えてしまったのです。

その時、マダレーナもお母さんも、あれはヨゼフ様だったのだと気が付いたのです。

マダレーナは、この不思議なことを一生忘れず、その時から困ったとき、苦しい時、ヨゼフ様に祈るようになりました。

　　八

親戚や村の人は、マダレーナがまだ小さいのに、一生懸命にお母さんを助ける姿を見て感心していましたが、教会の神父様は、勉強のできる賢いマダレーナが小学校の途中で勉強を終わらせるのはもったいないと思っていました。

そして、「この子には特別な才能がある」とお母さんにも言って、マダレーナがもう一度学校に戻り、勉強を続けられるようにしてくれました。

学校に戻ったのは十歳ごろでした。マダレーナを心配していたローザ先生も、遅れた分を一生懸命教えてくれました。

友達も大喜びでマダレーナを迎えてくれました。

マダレーナは、ずっとできなかった勉強を、みんなに追いつくように先生に聞きに行ったり、友達に聞いたりして、どんどん追いつきました。

先生はもっともっと進んで友達に教えられるように、たくさんのことを教えてくれました。

九

学年の終わりが近づいた時、ローザ先生はマダレーナの成績が驚くほど良いのを見て、「小さな先生」として、一番小さな女の子たちの世話をまかせました。

マダレーナは、宿題を見たり面白い遊びでみんなをまとめたり、勉強もさせたりお話を聞かせたり、子供たちから愛される小さな先生でした。

子ども達はこの小さな先生の言うことをよく聞きました。

マダレーナは心の中で、先生になるって素晴らしいことではないかと思うようになりました。

少し後、村に幼稚園が開設されました。マダレーナはようやく十四歳になったばかりでしたが、先生になってくださいと頼まれ、仕事としてお勤めするようになりました。

マダレーナのやさしさ、活発さ、賢さで、たちまち幼稚園の子供たちにとって、なくてはならない先生となりました。

こうしてモラーノの家に、少しですが収入が入るようになりました。

　十

ローザ先生はマダレーナに、「先生になる免許を取るための勉強をしなさい。神様はあなたに、先生になるためにふさわしい力を与えてくださいました。

人々に善を教える先生になるため、免許を取る勉強をしましょう。」

といって、本を貸してくださいました。

マダレーナは、この本の中で、先生になったら一生涯このように生き抜こうと思うことを、自分のものとしました。

それは、

先生になることは、司祭職に次ぐ最高の使命である。

公平であること、決してえこひいきをしてはならない。ももし特別に愛を注ぐ必要があるなら、貧しい人を優先しなさい。

教師は両親の代理である。知識を教えるだけではなく、神様のことを教えるキリストの弟子でなければならない。

マダレーナは十四歳のころからこのような目的で、先生と

しての仕事をしていたのです。

十一

こうして、マダレーナは十七歳｛現在の高校二年｝の時に、県立師範学校の試験に合格し、教師としての免許を取得し、小学校で正式な教師として働き始めました。

それから二年たち、県立師範学校で、上級教員資格に合格し、女子の高学年担当の教員になりました。ところが、男子の学校で教師が足りなくなり、マダレーナに声がかかり、そちらに勤めることになりました。

男子生徒たちにも、同じように柔和で真剣に、困難な学問を解りやすく教えました。そして、学問だけでなく道徳的にも皆の信頼を得るようになりました。

十二

そればかりではありません。授業以外に病人を見舞ったり、,夜寒くないか、困っていないか、明日学校に来られるかと心配な生徒たちを訪問していました。

町の人達はそれを知って、マダレーナを大切な先生として尊敬しました。

こうして、マダレーナは優しく人を大切にし、その上優れた知識を教える先生として愛されていました。

そして、マダレーナは家族にもやっと楽にさせることができるようになりました。

十三

お母さんへのプレゼント

マダレーナは、年を取ったお母さんんを楽にしてあげたいと思っていました。お母さんがいつも言っていた夢をかなえてあげました。

お母さんはよく、機織りであれた手を眺めながら、

「わたしは、小さな畑と鶏と、ぶどう棚のある小さい家を持つことができたら・・・」といっていました。

マダレーナは、そっと家を買って

「これは私からお母さんにプレゼントよ。」

とお母さんにおくったのです。

マダレーナは、今度は自分の夢の実現に踏み出しました。

十四

マダレーナがずっと持っていた夢、それは子供たちのために一生を捧げるシスターになりたいという夢でした。この夢を実現するためトリノという町で有名な、ドンボスコに会いに行ったのです。

ドンボスコはマダレーナとちょっと話しただけで、六年前、自分が創ったばかリの修道会「サレジアン・シスターズ」に、マリア様がお呼びになった人だ！と感じました。

ドンボスコはマダレーナをサレジアンシスターズの教育の使命のためにピッタリだと、すぐ修道院に来るように呼びました。

マダレーナは大喜びでしたが、周りの人はマダレーナとの離れるのが悲しく、別れを惜しみました。

お母さんも覚悟はしていましたが、とてもさみしく、はなれがたい気持ちでした。でも、喜んで送り出したのです。

十五

こうして、シスターになるために、マダレーナはモルネーゼ村にいきました。

そこでマダレーナは、驚きと喜びを感じました。なぜなら・・・

ここでで教えられていたドンボスコの教育法と、自分がローザ先生から、貸していただいた本から学んだことが、まったく同じだったからです。

そこでマダレーナは修道会に入ってすぐに、修練者として、みんなと生活を始めることができました。

仕事は、ニッツァ・モンフェラートにある本部修道院でで先生としての教育活動を続けることでした。

十六

マダレーナは修道院に入って二年後の、一八八０年九月二日に、生涯をイエス様におささげする約束をして、シスターになりました。

そしてシスターたちの責任者であるマードレ・マザレロをたすけ、ニッツァというところで先生を続けました。

マードレ・マザレロは、シスター・マダレーナのしっかりした考えと態度を見て、寄宿生たちの責任者としました。

また、その頃サレジアン・シスターズは、モルネーゼやニッツァなど北イタリアのほかに，シチリアという南の島にも、貧しい子供のため日よう学校や、洋裁を教える施設を開いていました。ところがシチリアは，キリスト教が広めにくい環境で、学校や施設がどんどんつぶされているという状況でした。そこで女子寄宿学校に、教員免許をもっている三人のシスターを送ることになり、シスターマダレーナはその責任に選ばれ、トレカスターニというところに行くことになりました。

十七

一八八一年九月五日に、シスターマダレーナは、シチリアに出発することになりました。

二人のシスターと一人の修練者と一緒に、五日間の旅の後、海のかなたに、シチリアの山々が見えるところまで来ました。

北イタリアとは違う、暑い島、エトナ山という山と海との間にあるトレカスターニ‼シチリア！神様が「ここで人々に神様の愛を教えなさい」とお任せになった場所です。

この島は当時、カトリックの教えを禁じ、学校や施設や修道院をなくそうとしている時でした。

　けれども四人は命を懸けてイエスの教えを広めようと、宣教の準備に燃えていました。

十八

太陽の島シチリア島で、シスターたちが最初に出会ったのは、貧しい少女たちのための寄宿学校の子ども達でした。

村の人々の多くは、よそから来たシスターたちを警戒し、中には悪口を言う人もいました。

けれども、サレジアン・シスターズの働きに期待をかけて、子どもたちをシスターたちのところに進んで行かせる人たちもいました。

学校の子どもたちは喜んで勉強し、シスターたちからいろいろなことを学ぶのが嬉しくて、この日々を感謝していました。

シスターたちは全力をあげて働き始めました。こうして、子どもたちも親も喜び、皆が教会に来るようになり、そればかりでなくトレカスターニの事業はどんどん大きくなっていき、サレジアン・シスターズはなくてはならないほど、村全体の力になっていきました。

シスターマダレーナは、ドンボスコの教えてくれた愛の教育法の実践で、周りを変えていく人でした。

十九

こうして、シスターたちの教育がシチリアの人々に知られるようになっていきました。

それで、そのころ生徒たちがたいへん荒れていた学校の責任者であった司教様から、「聖アガタ女子寄宿学園を引き取ってあなたたちの学校にし、生徒たちをみてくださいませんか？」と相談されました。シスターマダレーナはみんなと相談し引き受けることにしました。

この学園は、教育の場とは思えないほど荒れていました。どうにかしないと何かが起こりそう。そこでシスターマダレーナは、シスターたちと協力し、手に負えない七十人ぐらいの不良の女子学生に対し、いけないことはしっかり注意すると同時に、お母さんとしての優しさを示していきました。愛されたことのない生徒たちは、シスターたちの筋の通った優しいめと、愛情のこもる関わりにより、短期間のうちに、素直な生徒たちにかわっていったのです。

どのような方法を用いたのですか？との質問に対してシスターマダレーナの答えは、「全てはドンボスコの教育法のおかげです」と言うだけでした。

二十

シスターマダレーナは、こうして、呼ばれるところに行ってそこで神様の愛を燃やしながら、子どもも親も教会の人も、男の人も女の人も、優しさと母の心で関わり、シチリアを平和な島に変えていくのでした。

女の子に嫌がらせをする青年がいて困ると聞くと、乱暴な青年であっても、ひるむことなく呼び止め、優しく、けれど厳しくし、何が神様の望まれる道か、あなたの存在はどれほど大切かを知らせるのでした。

二十一

やがて、島の少女たちの中からシスターになりたいと望む人がたくさん出てきたので、彼女たちを育成する場所も指導者も考えなくてはならなくなりました。

ちょうどそのようなとき、アリー・マリーナという海辺に近い大きな土地を恩人が寄付してくれたのです。こうして、シスターになりたい人たちのための家を建てることができました。

ここに移ったシスターや修練者、子供たちは、この浜辺に住む人たちと一緒に仲良く、いろんなことを学びました。

シスターになりたいと望みをもつ人の中には、シスターたちの愛情によって心を入れ替え、今ではシスターマダレーナのそばで頑張っている、あの「アガタ学園」の生徒もいました。

二十二

「マルサラに来てください」、「ウスィッチーニに来てください」・「カタニアに来てください」

人々の呼びかけの中に神様の御声を聴いたシスターマダレーナは、これらの願いの声に答えて、日曜学校や裁縫学校、幼稚園などを開いていきました。シチリアには神さまの**「熱い風」**が吹き、シスターマダレーナの名は多くの人に知られるようになりました。

ここでちょっと不思議な話をしましょう

あたらしい学校を建てるとき、どんなに探してもよい場所が見つからず困り果てていると、何度も行き来して道の１つの通りの入り口の壁に、聖ヨゼフの聖画のついた建物が売りに出されていました。そして、その日のうちに持ち主と相談し手続きが済みました。誰もこの通りをしらなかったし、新しい建物が売りに出されるしるしもなかったのに！みんな大喜びはしたけれどとても不思議でした。

シスターマダレーナはおっしゃいました。「ご親切な聖ヨゼフ様がいるではありませんか。お祈りなさい」と。

二十三

最後にフランシスカ・ボンシニョーレの証言を聞きましょう。

「私はシスターになりたかったのでアリーにいたころシスターマダレーナと一緒に住んでいました。

あるとき、左手の中指が炎症をおこして手術を受けましたが、一ヶ月しても治りませんでした。そこで、別の検査をすると、先生からは『ことによると、中指は切断をしなければならないだろう』と言われ、これをシスターマダレーナに報告しました。

シスターマダレーナは、その晩、私を自分の部屋にお呼びになり、こうおっしゃいました。『あなたは指を直してくださいとイエス様に頼みましたか？』私は正直に『いいえ。』と答えました。するとシスターマダレーナは絶対的な口調でいわれました。『聖堂に行って、イエスのみ心の前にひざまづいてこう申し上げなさい。【私をここに来させたのは、シスターマダレーナです。二度と手術をしなくていいようにしてください】と』。

私は言われたとおりにし、それから安心して休みに行きました。」

二十四

次の朝、フランシスカは病院に行きました。先生は手術をするかどうか確認するため包帯をとりはじめました。

　包帯を取るのに痛みを感じると思って、目を閉じて歯をくいしばっていた彼女に

先生は「フランシスカ！」と大きな声で叫びました。

驚いて彼女が目を開くと、なんとフランシスカの中指はばら色になり、きれいになおっていたのです。

先生も驚いて叫びました。

「なんていうことだ！傷がなおっている！。」

フランシスカ本人はもちろん、この出来事は周りにいた人たちに、深い感動を残しました。このようにマードレ・マダレーナの信仰は、神様の心を動かすほど素晴らしく深いものだったのです。

二十五

神さまの教えをシチリアの島に種まいたマードレ・マダレーナ・モラーノ。サレジアン・シスターズの生きたお手本であるシスターマダレーナは、貧しいところに光と愛を、愛のないところに優しさを、優しさのないところに温かさを、温かさのないところに愛の熱をもたらした方。

彼女は、何よりも神様の愛を人々の心に目覚めさせる宣教女でした。

マードレ・マダレーナの周りで、子どもも大人も、貧しい人も、賢い人も、シスターも神学生も、神父様も、神さまのみ前でシスターマダレーナを送ってくださった感謝をうたっています。

マードレ・マダレーナが遺されたお言葉、「神様のみ前で、生きている間に、できるのにしなかった善い行いで、裁かれないように」　を心にとめましょう。

『シチリアの熱い風』

　　　マードレ・マダレーナのお話はこれでおしまい。